

産業勞務者の梅毒血清反應検査に關する統計的觀察

太田 長次郎

(保險院社會保險局健康保險保健指導所)

梅毒が如何に我が國民各階層の間に蔓延してゐるかに就ては幾多の研究業績がある。そしてそれ等の研究の大部分は、研究調査の便宜上からして、ある特殊な集團群か、または一定地域に局限したもののみであつた。即ち特殊な集團群として藝妓、娼妓及び酌婦等の接客業者、交通勞務員、産業勞務者、學童から受刑者に到るまで種々取扱はれたのである。殊に近來は産業勞務者に關するものが陸續として報告されつゝある現況である。しかるにこれらの研究は主として一地域に局限したものであつて、全國的な觀察を行つたものは殆どない。余の知る限りに於ては、大塚氏が大阪府下在住の工場勞務者に就ての研究からして、その出身地區別に全國的な觀察を下したものと及び一昨年厚生省豫防局優生課が1道21府縣の殷賑産業工場98、その勞務者 23,237名に就てワ氏反應検査を行つたものの二つあるに過ぎない。そこで余は性病豫防の對策を確立するためにも、社會保險運営の見地からしても、なほ産業勞務者の梅毒蔓延狀態に關する全國的な資料の追加提出される必要があると信じ、全國各道府縣にある健康保險相談所から當指導所宛に梅毒血清反應検査を依頼してきた材料を整理集計して、二、三の考察を試みたところ、若干の新らしき智見を得たので、ここにこれを報告して識者の御批判を仰ぐ次第である。

調査材料としては、昭和15年4月1日より同16年3月31日に至る滿1ヶ年間に於て、確實に成績の判定し得られしもの 15,270 例について調査したのである。梅毒血清反應術式としてのワッセルマン氏反應は、獨逸國法たるザックス氏變法を行ひ、それに村田氏反應を補助反應として併用し、そして成績判定にあつてはこれ等二反應ともに痕跡陽性(±)以上であつたものを陽性として取扱つたのである。

調査方法は當指導所規定の梅毒反應検査依頼書を男女の性別に二大別した後、各々つぎの四群に分類した。即ち、第1類、參考事項の記載あるも検査成績の陰

性であつたもの、第2類、参考事項の記載なくして成績の陰性であつたもの、第3類、参考事項の記載なくして成績陽性であつたもの、第4類、参考事項の記載があり、しかも陽性であつたものに分類し、この四群をさらにそれぞれ年齢別、業態別、潜伏梅毒の状況、梅毒血清反應の受檢理由、驅梅毒療法の状況等について統計的な觀察を試みたのである。

かくの如くにして行つた統計的觀察の結果は、つぎの如き結論に到達したのである。

- 1) 検査數は男子 13,353 例、女子 1,917 例の合計 15,270 例にして、このうち陽性は男子 3,190 例(23.5%)、女子 432 例(22.2%)であつた。
- 2) 地區別陽性率は男子に於ては九州及び沖繩地區の 35.9%を最高とし、北陸 33.4%、東山 31.9%これにつき、最低は東北地區の 11.1%であり、女子の最高は中國地區の 35.1%にて東海 32.3%、關東 30.0%の順であり、最低は近畿地區の 13.9%であつた。
- 3) 年齢階級別の陽性者數は男女ともに 25-29 歳が最高にして、男子に於ては全陽性者の 23.6%、女子は 27.0%であつた。
- 4) 男子に於ける業態別陽性率の第一位は飲食物工場の 33.3%にして、以下化學工場 32.2%、染織工場 27.9%、雜工場 26.3%、機械器具工場 22.6%、金屬製鍊工場 20.9%、特別工場 18.6%の順であり、女子は化學工場 27.7%、染織工場及び飲食物工場 22.9%、雜工場 22.1%、機械器具工場 21.5%、特別工場 20.0%、金屬製鍊工場 15.0%にして一般的に男女とも所謂平和産業に高く殷賑生業に低率を示してゐるのは注目すべき事象である。
- 5) 潜伏梅毒と認められるものが、男子に於てはその検査數の 6.6%、女子にては 10.4%であつた。しかしこれは男子陽性者の 26.7%、女子陽性者の 44.4%にあたる。なほ潜伏梅毒と認められるものの年齢階級別出現率は、男子にては 50-54 歳の 10.8%、女子は 40-44 歳の 15.2%が最高であつた。
- 6) 流早死産經驗者の 36.8%に陽性を認めた。
- 7) 結婚のために受檢したものは、その年齢階級受檢者數の 1.22%に過ぎなかつた。
- 8) 配偶者(夫)が性病に罹患してゐるために受檢したものの 54.0%は陽性であつた。

9) 驅梅療法を受けたことのあるものは男子陽性者の 79.5%, 女子陽性者の 33.8%であつた。

10) 驅梅療法(砒素劑注射)受療回数は、男子に於ては 1-5 回のもの 28.1% (治癒率 44.3%), 6-10 回のもの 33.3% (同 51.3%), 11-20 回のもの 27.7% (同 55.3%)であり、女子は 1-5 回のもの 33.5% (同 42.9%), 6-10 回のもの 35.6% (同 42.3%), 11-20 回のもの 24.7% (同 25.0%)であつた。

11) 感染後驅梅療法開始までの期間と治癒率との関係を見るに、男子に於ては 6 ヶ月以内のもの 80.5% (この治癒率 55.7%), 7-12 月のもの 10.0% (同 41.7%), 1-1.5 年のもの治癒率 36.8%, 1.5-2 年のもの治癒率 29.0%であり、女子にては 6 ヶ月以内のもの治癒率 62.5%, 7-12 月は同 46.7%, 1-1.5 年は同 42.9%, 1.5-2 年が同 36.4%であつた。

即ち男子は陽性者数の 79.5%が受療してをり、治癒率も 50.3%であるに對して、女子は陽性者の 33.8%しか受療してゐない。しかもその治癒率は僅かに 38.4%に過ぎない状態である。この理由は種々考へ得られるであらうが、感染後治療開始までの期間が男子より遅れてゐる事實も一原因をなしてゐると考へられる。

[詳細は別に發表する]

(受附: 昭和 17 年 4 月 30 日)